

学習面で困難を示す児童の読みスキル向上のための 個別指導

ー刺激ペアリング手続きを用いてー

学籍番号 229217
氏名 中尾百伽
主指導教員 野田 航
副指導教員 平井美幸

1. 背景と目的

文部科学省（2022）は「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」において、小中学校において知的発達に遅れはないものの学習面で著しい困難を示す児童生徒数の割合は約 6.5%であると発表した。また、特別支援教育支援員の支援の対象となっている児童生徒の割合は約 13.8%なのに対し、授業時間内に教室での個別の配慮・支援を行っている（特別支援教育支援員による支援を除く）割合は約 54.9%であった。児童生徒の教育的ニーズを確認しているものの、具体的な支援内容が学校全体で共有されておらず、支援が学級担任に任されている状況が伺える。特別な教育的支援を必要としている児童生徒について必要な支援がなされるよう支援の充実を図るとともに、全教職員で連携して支援が行き届くような学校体制を整える必要がある。

特別支援学級と通級指導教室に着目すると、特別支援学級の在籍者は約 2.1 倍、通級指導教室の利用者は約 2.5 倍に増加している（文部科学省,2021）。これからも特別支援学級と通級指導教室の児童生徒数の増加が見込まれる。特別支援学級と通級指導教室を児童生徒が安心して学ぶことができる場になるように学校の教育活動と連携させ、運営していかなければならない。

これらを踏まえ、本実践課題研究では読みに困難を示す児童に対してアセスメントを行い、それらに基づいて個別に指導を行い、その効果を検証して授業時の負担軽減や読みのスキル向上を目指す。アセスメントや指導においては、先行研究で効果の示されている応用行動分析学に基づくアプローチを採用した

2. 基本学校実習の取り組み

基本学校実習Iでは、実習校の特別支援教育に関する課題を聞き取った。結果として、支援する教員の数が足りていないことが小学校の課題だと分かった。また、基本学校実習を行なった令和4年度は、実習校には特別支援学級と通級指導教室がなく、全児童が通常学級で過ごしていた。そのため、人手が足りないことだけでなく、学校全体での支援体制や連携の仕方、個別の支援方法が定まっていないことも課題として挙げられた。基本学校実習IIでは、学習面の中でも読みに着目することとし、実習校と相談した上で読みで困難のある対象児童2名を決定し、別

室で読みのアセスメントと刺激ペアリング手続きを用いた読みの指導を行なった。別室指導中は、児童の反応や学習環境等を考慮して、様々な工夫を行なった。個に応じた支援の方法や環境を調整することが重要であると感じた。

3. 発展課題実習Ⅰの取り組み

発展課題実習Ⅰでは、基本学校実習Ⅱと同様に対象児童2名に刺激ペアリング手続きを用いた読みの指導を行なった。参加児2名とも事前に読むことができなかった全ての単語を読むことができるようになった。また、獲得した単語の読みは個別指導初日から約1ヶ月後の維持テストにおいても7割から8割維持されており、刺激ペアリング手続きによる読み指導は効果的であると確認することができた。対象児童2名とも、個別指導初日は「できない。」「また間違えた。」などネガティブな言葉が多かったが、指導が進むにつれ、「今惜しかった。」「次はいける。」などポジティブな言葉がととも増えていった。点数の伸びを確認できる視覚的なグラフを用いたことが「やればできる」という実感に繋がったと感じた。

4. 発展課題実習Ⅱの取り組み

発展課題実習Ⅱでは、発展課題実習Ⅰと同様に対象児童2名に刺激ペアリング手続きを用いた読みの指導を行なった。読みを獲得した後、日常の負担軽減という点に着目して、対象児童それぞれの困難さに合わせた指導へと指導内容を深めていった。結果として参加児2名とも事前に読むことができなかった全ての単語を読むことができるようになった。また、獲得した単語の読みは個別指導初日から約1ヶ月後の維持テストにおいても9割近く維持されており、刺激ペアリング手続きによる読み指導は効果的であると確認することができた。ただ、A児の読みの流暢性に関する困難に対する指導を深めて行うことができなかった。また、B児では漢字テストの点数にばらつきが見られ、効果的な指導ができていなかったため、満点を取るという目標に対する効果的な強化子を深く考えることができていなかったことの2点が課題として残った。

5. 総合考察

本実践課題研究では、学習面で困難を示す児童に刺激ペアリング手続きを用いて読みの個別指導を行い、読みスキルの向上を目的とした。個別指導を通して、児童2名とも読みに対する抵抗感が減り、学習を楽しみながら読みを獲得することができた。刺激ペアリング手続きは読みの指導に効果的であると確認できた。そして、指導効果が確認できたが、その効果は教材単独ではなく、児童一人ひとりに応じた細かな環境整備や強化子があったからだと感じた。また、他の教員と協働することの重要性を学んだ。別室指導を行ったのは著者一人だが、周りの教員に相談・協力してもらうことで支援内容が深まると感じた。別室指導だからといって一人で支援方法を考えるのではなく、一人の児童に対して、学校全体で向き合い、子どもの成長や環境に合わせた適切な指導を行う必要が明らかになった。